

Cunnington, Cecil Willett & Phillis. Handbook of English costume 6vols. London, Faber and Faber, 1952—1973. 22.2×14.5 cm <383.133-C-1~6>

セシル・カニングトン（1878—1961）とフィリス夫人は、共にロンドンの開業医である。セシル博士の50歳ごろ、偶然の機会から服装研究に没頭し、イギリス服装の研究家、収集家として世界的に知られるようになった。マンチェスターの衣装陳列館にある膨大な服飾コレクションは、博士が生涯をかけて収集したものである。なおフィリス夫人は、博士の亡きあとも今日まで協力者と共に多くの著作を発表し、活躍している。

本書は夫妻のイギリス服装研究の集大成として、時代別に刊行された双書である。各巻は、それぞれ男女別に分けられ、さらに服種別に独立した詳細な解説が付されている。各巻の内容は以下の通りである。

1. **Handbook of English mediaeval costume**, 1952. (第1巻) は A.D. 800—1500 年までのイギリス中世の服飾について簡潔にまとめられている。図版の資料は同時代の写本、プラス（教会の壁などにはめこまれた小記念碑）、文献などから得られた。これらに基づき、9・10世紀、11世紀、12世紀、13世紀、14世紀前半、後半、15世紀前半、後半の8章に分けてそれぞれ男女別、服種別に B. フィリップスンによる挿図をまじえ解説されている。この期の女性服の特徴は、直線的なロマネスク様式から素朴なコット形式へ移行し、15世紀に入ると胴部への美の追求が始まる。男性服については、十字軍の影響が指摘できる。巻末に用語辞典、参考文献、図版の出典、索引が付されている。

2. **Handbook of English costume in the sixteenth century**, 1954. (第2巻) はチューダー王朝（ヘンリー8世からエリザベス女王まで）のファッションである。年代は、1500年から1545年までと1545年から1600年までの2章に区分され、それぞれ男女別、服種別に記されている。挿図は第1巻と同じ B. フィリップスンによる。この期の男性服は、スラッシュヤパフで装飾され、女性服では身体の関節をしめつけ、固定させた服装が特徴となっている。この時代の後半には、しばしば男女類似した服型が好んで用いられた。毛皮の使用、刺繍、トリミングとしてのレースの使用など衣服に施された装飾は、この時代の流行の重要な部分であった。巻末には材料用語辞典、図版の出典、主題・図版・一般事項別の索引が付されている。

3. **Handbook of English costume in the seventeenth century**, 1955. (第3巻) 17世紀のイギリスでは、ジェームズ1世、チャールズ1世、ピューリタン時代(1649—1660)、王政復古時代へと推移した。ヨーロッパの服飾に流行していたスペイン様式の衰退と同時に、フランス・モードがヨーロッパを支配するようになった。イギリスでは、16世紀末の豪華な衣装から次第に簡素化への傾向が現われ、17世紀半ばごろまでにはピューリタン派の質素、剛直、堅実性を表現するようになった。色彩もくすんだ色調となり、黒がこの時代の一般的な色であった。年

代は1600年から1650年までと1650年から1700年までに区分し、男女別、服種別に B. フィリップスンとフィリス夫人の挿図をまじえながら解説されている。巻末に用語辞典、図版の出典、事項索引が付されている。

4. **Handbook of English costume in the eighteenth century**, 1957. (第4巻) 18世紀になると前代とは違って大量の、しかも有用な情報源が私たちに残されてくる。過去の時代の人々の服飾についての真の知識は、そうした出典に頼らなければならない。それらを整理する必要から、著者は多くの情報源を次の様に分類し、本文に先立って掲載している。①博物館や個人のコレクションにおける実際の衣装 ②肖像画 ③定期刊行物 ④詩 ⑤演劇や小説 ⑥日記 ⑦手紙 ⑧家庭の勘定書や請求書。また、18頁に及ぶ序文では、アン女王に始まり、ジョージ3世までのこの時代の背景と服装の変化を述べ、とりわけイギリスに起った産業革命の役割とフランス革命の影響を重要視している。本文の構成は17世紀と同じである。巻末には材料小辞典、材料の価格、図版の出典、主題・図版・一般事項別の索引が付されている。

5. **Handbook of English costume in the nineteenth century**, 1959. (第5巻) 19世紀の中心はビクトリア時代(1837—1901)である。産業の大発展により中産階級がファッションを支え、流行を生み、創出する力はこの人々の手に移っていった。「19世紀の概観」として、本書の冒頭には、20頁に渡り多くの資料を駆使してファッションの概要が述べられている。本文の第1章は男性、第2章は女性に分けられ、それぞれ10年ごとに区切って、前巻と同じイラストレーターによる挿図をまじえて服種別に解説されている。巻末には材料小辞典、図版の出典、事項索引が付されている。

6. **Handbook of English costume in the twentieth century, 1900—1950**, by Alan Mansfield and P. Cunnington. 1973. 本書は C. W. カニングトンの亡き後、A. マンスフィールドと P. カニングトンの共著でハンドブック・シリーズの第6巻として1973年に出版された。20世紀前半のファッションの変化を可能な限り簡潔に述べ、変化をもたらした要因を指摘することを企図した本書は、1900年から1950年までを女性の服飾については10年ごとに、男性の服飾については25年ごとに区切って、V. マンスフィールドによる挿図をまじえて解説している。巻末には、服装用語辞典(見出語約230)、参考文献、事項索引が付されている。

以上の6巻が現在までそれぞれ個別に刊行されている。多くの著作の中でも『イギリス服装史ハンドブック』は夫妻のライフワークで、収集に基づく実証性がすみずみにまで行きわたっている。現代的視野から整えられたこの独特な編集法は、きわめて便利なものであり、服装史研究者にとっては欠くことのできない基本的文献といえる。(内野)

左上 19世紀初めの扇

左下 同じ頃の白モスリンのドレスと靴と靴下どめ

右 1805年～10年までの昼の服2体